

「日本語は普及するか」
ブルース・L・バートン
1997.10.7 放送

今回は日本語という言葉、とくに外国語としての日本語について考えてみたいと思います。ほとんどの視聴者の皆さんは、日本語を母国語として、毎日使っているわけですから関心が高いのも当然かと思いますが、日本語を話す我々外国人にとりましても、苦勞して習得するだけに、非常に関心が高いテーマの一つです。

さて、日本語はどのような言葉で、世界の言語の中でどのような位置を占めているのでしょうか？

ご覧のグラフは、世界の主な言語に関する基本的なデータを示したものです。グラフの見方ですが、一番上の中国語を例にすれば、この棒全体の長さが中国語を話せる総人口の規模を表していて、訳 10 億人ということになっています。また、棒の中の青いところが中国語を母国語とする人、赤いところが中国語を外国語として話せる人の数をそれぞれ示しています。

まず注目していただきたいのは、日本語は話す人の総数で言えば、世界で 10 番目になります。先の中国語が一番多くて、それから、英語、ヒンディー語、スペイン語、ロシア語と続き、日本語はちょうど 10 番目で、フランス語の一つ上です。

ここでもう一つ注目していただきたいのですが、各言語を話す人の内訳をよく見てみますと、ほとんどの言語は、母国語として話す人がもちろん多いのですが、外国語として話す人も全体の何割かを占めています。ところが、日本語だけは違います。日本語を使うのは、ほとんど国内に住んでいる日本人だけで外国語として話す人は非常に少ないのです。つまり日本語は、外国語として話される比率が他の言語に比べて著しく低いのです。これはなぜでしょうか。

その理由は、他の言葉との比較で説明したいのですが、先ほどのグラフをもう一回ご覧になると、外国語としてよく話される言葉の中に、二つのタイプがあるということが分かります。

一つは、インドのヒンディー語のように、一つの国の中に複数の民族が存在し、その共通語、あるいは標準語として機能する言葉です。

もう一つは、英語やスペイン語のように、一つの国の中というより、国際的な共通語として機能している言葉です。言うまでもなく、これらの言葉が国際的共通語としての役割を果たすようになったのは、それぞれの国が、歴史的にそれだけ大きな権力をふるい、多くの国々や人々を支配してきたことの結果でもあります。皮肉なことではありますが、国際語の普及や定着の背後には、戦争や帝国主義の歴史があるわけです。

このように考えると、日本語を外国語として話す人が少ない現状を次のように説明できるかも知れません。つまり、日本という国は、インドのような多民族国家でもなければ、

欧米の諸国のように、長い間世界の各地で大きな影響力を持った歴史もないから、日本語を話す人口は少ないのだ。このように言うことももちろんできるでしょう。

しかしこのように言ってしまうと、わざわざ日本語を学習しようとする外国人がいないかのような印象を与えるかも知れませんが、それもまた実状とは違います。数は少ないのかも知れませんが、日本語の勉強に励んでいる外国人も一定数はいるわけです。もちろん私もその内の一人であります。

では、どういう人たちがどのような目的で日本語を勉強するのでしょうか。

海外の日本語教育の実態については、国際交流基金というところの調査データがもっとも詳しいと思われます。残念ながら、最新の報告書が1993年に出たもので、データが若干古いのですが、とりあえずそれを手掛かりに考えましょう。

このグラフは、先ほど言った報告書から写したのですが、海外における日本語の学習者の数を表しています。左から1979年、84年、88年、90年、そして93年のデータが載っていますが、ご覧の通り、この14年間に、日本語の学習者は驚異的に増えておりまして、1993年の時点では、全世界で約162万人となっています。

同じ報告書によると、学習者がもっとも多い地域は、東アジアで、つづいて、オセアニア、東南アジア、北米という順になっています。国別で言えば、韓国がもっとも多く、その次が中国で、3番目がオーストラリアです。私の出身国アメリカは6番目で意外と低い順になっています。

問題は、この報告書が出た93年より後の動向ですが、これについては、あまり頼るべき資料はありません。しかし、関係者の話や断片的なデータを整理すると、事情がこの数年かなり変わってきたらしく、全体的な伸び率が鈍くなっているということが言えると思います。ただ注意しなければならないのは、地域差もあって、アジアやオセアニアでは、日本語に対する関心がまだかなり高いのに対して、北米や中南米などでは、学習者が逆に減っていると言われている点です。

では、こうした傾向から何が読みとれるのでしょうか。それに答えるために、外国人がなぜ日本語を勉強するのかという基本的な問題に触れる必要があります。日本語を勉強する動機はもちろん人によって違います。中には、純粋に日本の文化に魅力を感じて日本語の勉強を始める人もいれば、日本語を覚えれば将来的に役に立つ、つまりいい就職につなげるだろうという打算的な考え方で始める人もいます。

しかし直接的な動機がどうあれ、一つ言えるのは、日本という国が個人の学習者にとってある程度の存在感がないと、まず日本語を勉強しようとは思わない、ということです。この意味では、日本語の学習者の数は、日本という国の国際的地位を端的に表すバロメーターと言えるかも知れません。

では、この点を踏まえて、最近の日本語に対する関心の移り変わりについてもう一度考えてみましょう。結論から言えば、80年代から日本語の学習者が急増したのは、いわゆるバブル経済との関連で説明できるのではないかと思います。つまり、この時期に、日本

の経済力が世界の注目を集め、その結果、日本という国や日本語という言葉に対する関心も急激に増えました。しかし、90年代に入ってから、バブルがはじけて日本経済の根底が揺らぎ始め、日本の存在感が少しずつ薄れていき、それにつれて日本語への関心も冷めていった。このようにとらえることができると思います。

日本の知識人の中に、日本語が将来、英語やフランス語のように国際的な言語となることを期待している方もおられるようですが、このような日本語に対する関心の推移や先程のデータを考え合わせますと、その可能性は当分の間ないように思われます。

個人的には日本語が第二の英語になる必要はないと思いますが、長い間日本語を勉強してきた者としては、より多くの人に学んで欲しいと言う気持ちはあります。また、客観的に見ても、日本語の勉強に励む人たちは、後々日本のよき理解者になり、真の意味での国際交流に貢献することが多いのです。日本語学習者は他の言語に較べて人数が少ないかも知れませんが、少ないだけに大切な存在であり、視聴者の皆さんも是非応援していただければと思います。

では。